

【Dies irae】 奇跡の朝に祝福を Side Riza 【2016—2017玲愛誕生
日SS】

桜月 (Licht)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Frohe Weihnachten & 玲愛先輩お誕生日おめで
とうございます！

玲愛先輩の本編一年前の誕生日の話です。

目次

【D i e s i r a e】奇跡の朝に祝福を	S i d e	R i z a【20
16 玲愛誕生日SS】	—	1
【D i e s i r a e】奇跡の朝に祝福を	S i d e	V a l e r i
a【2017 玲愛誕生日SS】	—	13

【Dies irae】奇跡の朝に祝福を Side
Riza 【2016 玲愛誕生日SS】

SSide Riza

穏やかに降り注ぐ朝の光に淡く照らされた手元。

ボウルの中でカシャカシャと軽やかに音を立てる泡立て器。

綺麗なカーブを描くボウルの銀色に映える、薄いクリーム色がとろりとろりと滑らかに混ざり合う。

手を止めないままそれをじっと眺めていれば、脳裏に浮かぶこれらのこと。

想像してしまった微笑ましい光景に、つい口元が綻んでしまう。

今朝は、特別なの。

年に一度しか訪れない、彼女のとても大切な一日。

その朝はほんの少しだけ、いつもと違う始まりを迎えるわ。

泡立て器が立てる掠れた音に混じりだした違う音。

それはキツチンに近づいてくる聞き慣れた彼女の足音で。

「おはよう、リザ」

引き結ばれていた唇が開いて、いつもと変わらない朝の挨拶が耳に届く。

それに微笑みを浮かべながらゆるく肩越しに振り返って、からかうように声を放った。

「おはよう、玲愛。今日は出掛けないの？ せっかくのクリスマスじゃない」

そうしたら、呆れたようにきゅっと細まった薄紫の瞳。

パジャマの裾をふわりと揺らして、分かっているくせにと、言葉にしないまま小さな溜め息混じりにあったかそうなもここのスリッパの爪先がタイルの床をこつりと蹴って。

「そんな気分じゃないよ。藤井くんたちに誘われたけどお家の手伝いが忙しいからって断った」

「あら、あなたが仕事を手伝ってくれたことってあつたかしら？」

「あつたよ、ちよつとくらいは。たぶんだけど」

「ふふっ、そうね。ちよつとくらいは、あつたかもね？」

澄ました顔してさらりと零した声に笑ったら、ふてくされたようにちよつとだけ膨らんだ頬。

少しだけ子供じみた仕草。甘えられているようで悪い気はしないわね。

身近に暮らしていると分かるけれど、こういう素の表情を見せられる相手が玲愛にはとても少ない。

けれどそんな玲愛にも友達ができたようで、育て親としては少しホツとしているのが正直なところ。

学校から帰ってくるたび、口にするのは彼らのことばかり。

高校に入学して以来、初めて出来た年下の友達たちのことを何かあるたびに教えてくれる玲愛の顔が脳裏に浮かぶ。

素っ気ない振りは装うけれど、喜んでるのが隠しきれない。それをまた、私に伝えようとしてくるところが微笑ましくて、私自身も嬉しくて。

つられて緩んだ口元をボウルから離れた指先でさりげなく覆い隠した。

だってこれ以上笑ったら、玲愛ったら本当に拗ねちやいそうなんだから。

こないだの休日に買い物でたら玲愛と二人で歩いたけれど、冬景色の広がる街並はクリスマススムード一色で賑わっていたわ。

夜になれば綺麗なイルミネーションに彩られて、また一ついい思い出ができたのだけど。

友達に誘われたって、玲愛は言ったわね。

本当は行きたかつたんじゃないかしら。

誘われたことが、本当は嬉しかったはず。素直になれずに断ってしまつたんでしょう。

素直になるのが、怖かつたんでしょう。

彼女の背負う^モ運命を思えば——例え何も明かされておらず言葉

にすら出来ない感情を持って余しているだけなのだとしても、その選択はきつと正しい。

育て親としては正直なところ、正しいと言い切るには少し複雑な気分。それは僅かばかりのあの子の笑顔を、奪ってしまう選択だと分かるから。

——ジリリリリリ！

暗い所へ落ちかけた心をはつと打つように、キッチンを通り過ぎたリビングからジリジリとけたたましく鳴り響いた電話。

まるで不甲斐ない私を諭すようなタイミングで響いた大きな音にほつと胸を撫で下ろす。

明るく切り替えた心に浮かんだ微笑みを湛えて、いつもの声音でさやかなお願いを口にする。

「ごめんなさい、今は手が離せないの。玲愛、お願い。代わりに出てくれるかしら？」

「わかった。いいよ」

少しだけ掲げた手元のボウルに落ちた薄紫色の視線。

お願いはあっさりと聞き入れられて、普段と変わらないように思える素っ気ない返事が届く。

だけど心持ち、語尾が上がり気味に感じたわ。それは気のせいかしら？

いいえ、きつとそんなことはない。

だって今日は特別な日だもの。

あの子にとつても、私たちにとつてもね。

リビングに続く敷居を駆け足で跨いで、止まることなく鳴り響く電話に寄っていく華奢な背中。それが壁の影に隠れて半分くらい見えなくなる。

微かに視界に映ったあの子の腕が受話器を取る仕草をして、同じタイミングで響いていた大きなコール音が鳴り止む。

玲愛の受けた電話の相手が誰か知れないまま、離れた場所で始まった通話。

きつと電話の向こうの相手が喋ったんでしよう。

』
——ガチャリ。

無言で、玲愛が受話器を置いた音がした。
早いわ、だいぶ早いわね。あれじゃあ挨拶すらろくに言い終えられない早さよ。

瞬殺で通話が断ち切れちゃったけどいいのかしら？

って、いいわけないわよね。

イタズラ電話なら仕方ないけれど、そうじゃないならあれはいけな
いわ。

ああでも、相手にもよるのかしらね？

——ジリリリリリリ!!

切られた途端、負けじと間髪入れずに鳴り響いた電話の音。しばらくのコール音のあと、玲愛がまた無言で受話器を取る仕草が視界の端に映る。

そして、ガチャンとさつきより強めに受話器を置く音もすぐに聞こえて。

——ジリリリリリリリリリリ!!!

懇願めいてリビングに響いた、電話の音。

さつきまでは強気に響いていたような気がするのに、切られ続けて三度目ともなると音に必死さが滲むわね。

聞いている側の捉え方の問題なんでしょうけど、きつと電話の向こうの相手も継るような気持ちになってるんじゃないかしら。

玲愛ってば、こういうとき本当に容赦しない子だから。まったく、誰に似たのかしらね。

三度目でやつとまともに耳元に押し付けられた受話器。微かに漏れて聞こえる、電話回線の向こうの誰かの声。

』
「……………」

キッチンから様子を伺っても、受話器は今度こそ持ち上がったままなのに玲愛は黙ったまま。

相手の声に耳を傾けているというより、端から会話する気がないみ

たい。

そんな状態だから、つい苦笑して肩を竦めた。

この様子じゃ、電話の相手が誰かなんて訪ねるまでもないわよね。玲愛があんな態度を取るなんて、あの人くらいしかいないから。

きゅつと引き結ばれた口元。そっけないふりをしているけれど、きつと内心は嬉しくてしようがないでしょう。

素直じゃないあの子なりの甘え方が微笑ましくて、つい忍び笑い。素直じゃない態度を笑ったのがバレたらやっぱりあの子は拗ねるでしょう。

何でもないフリをしてきゅつとボウルと泡立器を握り直して、微笑ましい会話にこっそりと聞き耳を立てる。

いつもならそういうことはしないけれど、今日だけは聞かないって選択肢はないわ。だって特別な日なんだから。

無粋だって思うかしら？

そうね、でも聞きたいの。どうしても他人事ではいられないわ。

私たちはあの子のことになるとそういう部分が顔を出すから、育て親の我侭だと思つて許してくれないかしら。

それに、あの子とあの人との会話なんて、この先そう何度もあるわけじゃないでしょう。

だからお願い、少しだけ。無粋な私を見逃して欲しい。

「ちゃんと聞こえてるよ。」

すごいね、神父様。喋つてないのに私だって分かるんだ」

彼が不安になるくらい一人で喋らせたあとで、やつと澄まし顔して結ばれていただろ唇が応える気になったみたい。

呆れ混じりの玲愛の声、電話の向こうの彼の声が誇らしげに跳ねたのが分かる。

「ふうん、それホントかな？」

リザ、神父様がなかなか連絡くれないって言つてたよ。フォローしておいた方がいいんじゃない？」

玲愛にからかわれて、狼狽えたみたい。こういうやり取りを聞くのも、久し振り。

ええ、昔からずっとそうだったわよね。あの人、玲愛には本当に弱いから。

「今から話せばいいんじゃないかな。きつと喜ぶよ。」

それに神父様、リザに用があつてかけたんでしよう？　ちよつと待つて、電話変わるね」

』

受話器を置いて、踵を返そうとしたんでしよう。スリッパがきゅつと床を鳴らした音が小さく聞こえて。

だけどそれを彼の声が静止して。

ぴくりと、跳ねるように揺れた細い肩。

玲愛の身体が縮こまるように強張つて、彼女を取り巻く空気までつられて緊張したみたいいきゅつと引き締まる。

』

しばらくの沈黙の後、まるで魔法の呪文でもかけられたみたいに強張つた身体がふわりと解けて。

ゆるりと緩んだ空気、辺りに滲んだのは柔らかな喜びの色。

あの人にはいつも素直になれないあの子だけど、華奢な背中から隠しきれずに溢れる。

「ありがとう、神父様。一番乗りだね、嬉しい？」

』

「リザ？　キッチンにいるよ」

彼に私の所在を問われたみたい。

受話器を握つたまま、壁に阻まれて視線は合わないけれどちらりと玲愛がこつちに顔を向けた仕草をしたのが揺れた空気に分かった。

』

「ごめんなさい、イタズラしたかったんだ。久し振りだし、ガマンできなかったの。怒つた、神父様？」

こそつと潜めた声で愛らしく問えば、もちろん彼には効果は絶大で。

「……何それ痛いね。私、そんなつもりないんだけど」

『うるさいな、神父様の変態。そんなこと言うならもう切るから』
彼の愛情表現を鬱陶しそうに振り払う。

「だけど始まりとは違って、いつまで経ってもガチャンと置かれない受話器。」

素直じゃないあの子の気持ちは、私たちにはとっくにお見通し。
先を促すように届いた彼の声。

それに応えるように、素直じゃない玲愛の唇も声を紡いで。
途切れることなく会話は続いていく。

電話線を通じて、国を越えて交わされる日常めいた親子の会話。
その懐かしさと、微笑ましさに聞いている私まで嬉しくなる。

ふと、聞き耳を立てるのに一生懸命でとっくに作業の止まってしまった手元を見下ろしてつい苦笑い。

その間にも、彼と彼女の会話は交わされ続けて。

「イヤ。そんなことしたら絶交するから」

いつの間にか会話はいつも通りの残念な方向に転んだみたいね。
きっぱりとした玲愛の拒絶の声。

受話器の向こう、それに当然追い続ける彼。

「ダメ、絶交。そんなことしたら絶対、口きいてあげないから」

突き放すようにきつい言葉を吐いているのに、その声はとっても楽しそうに弾んでいる。

それもそうよね。彼に対する、素直じゃないあの子の精一杯の甘えだもの。

「ちよつともなにもないよ。一ミクロンもない。残念だね、神父様」

ぴしやりと言いつつ切った声は勝ち誇っていて、嬉しそう。

縫ってくれる彼が、玲愛は嬉しくてしようがない。

離れているから余計にでしようね。声を聞きたいと素直に態度に示してくれる彼がたまらないでしょう。

だって、あなたと関われないうのはイヤだって声に出して訴えて貰えるなんて、それはとても幸せなことだと思わない？

「リザに？ うん、分かった。伝えるね」

ひとしきりからかって、からかわれ合って、満足した会話がまた先へと進む。

「……ちゃんと、届いてるよ。ありがとう、神父様」

そつと声を潜めて告げた玲愛の精一杯のありがとうを、大事そうに握られているはずの受話器が拾って彼に届けてくれる。

「うん。またね、神父様」

交わされた、別れの挨拶。

終わってしまう会話を静かに聞き届けて、玲愛を変わず大切にしてくれた彼に密やかに感謝を告げる。

——カチャン。

少し寂しげにそつと置かれた受話器の音。

ねえ、玲愛。もつとお喋りしたかったのは、どっちの方だったのかしらね？

少しの沈黙の後、ゆっくりとキッチンへ向かう足音。それを聞きながら、苦笑交じり視線を戻して向き直った作業台。

何でもない風を装って、泡立器を握ったまま止まっていた手を動かす。

足音と重なって、キッチンにカシャカシャと乾いた音。

綺麗なクリーム色が薄く螺旋を描いて、蕩けて一つに混ざ合う。

やがて、聞こえる音は泡立て器が立てる音だけになって。

私の真後ろで、ぴたりと止まった玲愛の気配。

ほんの少し、躊躇したように宙を彷徨った玲愛の右手。

小さく息を吞んで、微かに鳴った細い喉。きゅつと音を立てて床を鳴らしたもここのスリッパ。

伸びてきた細い両腕。背中に子猫みたいにぴとりとひつついた、暖かい温もり。

「どうしたの？ 今朝はずいぶん甘えん坊ね。子供みたいよ、玲愛」
後ろからぎゅつと抱きついてきた玲愛にくすくすと笑って、私の工

プロンを緩く掴んだ指先を、重ねた掌でぎゅっと包み込む。

そうしたら、拗ねたみたいにセーターの背中に擦り付けられた柔らかな頬。

「そういう気分なんだよ。たまにはいいでしょ？」

「ええ、歓迎するわよ。もっと甘えてくれてもいいくらい」

受け入れた言葉に、重ねた指先の熱に、ほっと胸を撫で下ろしてくれたのが引っ付いて揺れた華奢な肩から伝わって。

それに少し、胸の奥がツンとした気分になる。

甘えられて、嬉しくないわけがないのに。あなたを私が否定するなんて、あるわけがないのに。もっと欲張ってもいいくらいなのに。

彼があなたを受け入れてくれることを喜んだのと同じ感情が、私にも向けられていることがとても嬉しい。

本当はそんなことを喜ぶ資格なんて私にはないのでしようけれど、それでも嬉しい。

ああ、今日くらいは喜んでもいいかしら。

素直に、この喜びに浸ってもいいかしら。

「電話、神父様だった。リザにありがとうって伝えてって」

「そう、分かったわ。ありがとう、玲愛」

磨りガラスの窓から柔らかく朝日が降り注ぐキッチンで、ぴったりと引っ付きあったまま私たちの会話は続く。

穏やかな気持ちに浸りながら、交わす言葉の一つ一つを大切に思いながら。

「ねえ、リザ。ケーキ、ちゃんと蝋燭立ててね？」

「もちろん。ちゃんと十七本揃えて買ってあるわよ。」

——ああ、去年より一本増えたのね」

「うん、増えた。一つお姉さんになったよ」

きゅっと力の入った指先に、ツンと下に引っ張られたエプロン。

視線を落とせば、

触れ合ったせいで、トクントクンととてもよく聞こえる玲愛の心臓の音。

期待してくれているのかしら、いつもより鼓動が少し早い。

この子が、私の気持ちを喜んでくれるのなら嬉しい。
私があげられるのは、この気持とささやかなプレゼントだけだけ。
それでもいい、伝えたい。

「誕生日おめでとう、玲愛。また一つ大人になったのね」
ぎゅっと小さな手を握って、精一杯の愛情を込めて贈ったお祝いの言葉。

形作った言葉にどれだけの意味があるのか、深く感じすぎて心が痛い。

約束のときは、足を掬われそうなほどすぐ側に。大きな顎アギトを開いて私たちを深淵へ呑み込もうと今か今かと待ち構えている。

ああ、そうなのだ。もう、一世紀をかけて仕組まれた壮大な運命はどう足掻いても変えられない。

だって、次の誕生日にはこの子はもう――。

「……っ」

浮かんだ言葉の続きを、引き千切るようにして掻き消す。

細い腕に淡く抱きしめられたまま振り向いて、華奢な身体を抱きしめ返した。

きつく、きつく。今この場にはいない彼のかわりまで。

彼女が生まれ落ちた奇跡に込めた想いが届くように、祈って。

「……苦しいよ、リザ」

「そうね、ごめんね玲愛。でもね、私嬉しいの。あなたが生まれてきてくれて本当に嬉しいのよ」

ごめんねともう一度囁いて、細い肩に埋めた頬。

込み上げる感情に我慢がきかないまま華奢な身体を壊さないようにだけ気をつけて、今日だけだと逸る心に強く言い聞かせて。

きつく抱き締めた腕の中で、呆れたように溢れた玲愛の吐息。

酷くしすぎたかしら。困らせてしまったかしら。

不安になって、そっと上げた顔。

触れ合った視線を合わせれば腕の中、優しい顔をして私を見つめ返してくれる玲愛がいて。

その顔があまりにも優しく大人びていたものだから、彼女の成長が

嬉しくて、つい吹き出して笑ってしまった。

抱いた不安は感じた喜びに塗り替えられて、戻ってきたいいつもの穏やかな空気。

それに背中を押されるまま、この子の特別な日の思い出をもっと素敵にしたくて、喜んで欲しくて心が動くままに言葉を紡ぐ。

「おやつ時間が楽しみね。いっしょにケーキを食べましょう。今年も自信作よ、気持ちを込めて焼くから楽しみにしてて」

「うん。リザの焼いてくれるケーキ好きだよ。早く食べたいな」
ふわりとはにかんで、玲愛の目元が幸せそうに緩む。

視界にまっすぐに飛び込んできた彼女の姿にとつくの昔に枯れ果てたはずの涙が溢れそうな気持ちになった。

ああ、ダメね。私にはそんな資格なんてないのに。

それでも、彼女がそれを望んでくれるなら私は彼女を守る存在でありたい。

約束の時間が始まるその間際まででいい、それ以上は望まない。
だからどうか、あと残された僅かな時間だけ、そうであることを許して欲しい。

抱えた罪は重いけれど、今腕の中に託された命を慈しむことをやめたくはない、諦めたくはない。

さらさらと流れる銀の髪を撫でて、両手できゅつと包み込んだ頬。こつんと額を合わせて告げる。

触れ合った場所から、少しでも多くこの気持が伝わるように願って。

「——大好きよ、玲愛。生まれてきてくれてありがとうね、愛してるわ」

「知ってる、リザ。私も大好きだよ」

一回り小さな掌が、私の両方の手の甲をぎゅつと包み返してくれて。

目の前に、私に素直に喜びを伝えてくれるはにかんだ愛らしい笑顔。

頬から離れたと思ったらぐつと伸びてきた細い両腕。

気持ち伝え返したいとばかり、ぎゅっと抱きついてきた玲愛。

二人して引つ付いたところから気持ちよくて、嬉しくて、心から込み上がる幸せに促されるままくすくすと笑い合っ

いつもと違って少しだけ特別な思い出が出来た、玲愛の十七歳の誕生日の朝。

磨りガラス越しに降り注ぐ朝日の中、私に甘えてくれる華奢な身体を愛いっぱいに抱き締めて、願う。

どうか、この笑顔を守れますように。

あと少しだけでいい、私の大切なこの子の日常が穏やかでささやかな幸せに包まれますように。

彼女と共に過ごす仮初めの私が、彼女の幸せを支える礎となれますように。

END

【Dies irae】奇跡の朝に祝福を Side
Valeria【2017玲愛誕生日SS】

SSide Valeria

天井から下る明かりが落とされた、薄暗い部屋の中。朽ちかけて垂れ下がるカーテンの微かな隙間から差し込む月明かりだけが唯一の光源だが、夜目が効く瞳では明かりの有無など大した問題ではない。そろそろかと、壁に掛けられた簡素な造りの時計の秒針から聞こえる僅かな音に耳を澄ます。時差を鑑みれば、向こうは朝だ。連絡を取るには、丁度いい頃合いだろう。

閉じた瞼の内に降りた暗闇に、思い浮かべる情景は此処とは遥かに離れた裏側のこと。

予報では、あの街の空は晴れているらしい。四季がある国であるから訪れた冬に気温こそ低いだろうが、冴えた空気越しに見る景色は一層に美しいだろう。

手入れの行き届いた緑が茂る、柔らかい陽の光が差す庭を抜けた先に立つ教会の一部屋に、今日も変わらず彼女はいるはずだ。

そろそろ朝食の時間ではないだろうか。それなら、彼女はもう起きただろうか。それともまだ温かい毛布に包まれてぐっすりと眠っているだろうか。

ああ、最後に寝顔を見たのは、もうどれくらい前だったか。

独り言ちて、極東の地を立つ前夜に密やかに眺めた幼い寝顔を思い浮かべる。

あのときも、こんな風に辺りは薄暗かった。あどけない眠りを妨げないようにと照明を落とした薄暗い部屋の中、掻き消えてしまいたいようなほど小さな寝息を聞きながら見た光景はまだ鮮明に脳裏に焼き付いている。

それはそうだろう、たった十数年ほど前のことなのだから。

であれば、これくらいのごときは造作もない。この身はとつくの昔に

まっとうな人間を逸脱し魔に堕ちた存在であり、既に一世紀近くを生きている。その異常性故か、まだ遙か昔に辛うじて人であった頃の記憶すら当時の五感を貫いた感覚そのものをまざまざと思い出せるのだから。

特に、あの日の出来事など恐ろしいほどに鮮やかに蘇り、心を苛んでやまない。

噎せ返りそうな血の臭いを伴って目の前に広がった凄惨な光景が衝撃的すぎて、ただただ忘れられないだけかもしれないが、それでもこの記憶力をただの人とするには手に余るだろう。

そうして人の手に余るそれはこの身にとつて悪くもあるが、良くもある。長く生きたこの身が受けた出来事は、何も、ただ辛く、ひたすらに悪いことばかりではなかったからだ。人として生きたことがある以上、今もその皮を被つて内に募る魔を隠して生きている以上、良いこともたしかにあったのだ。

そうしてそういう良い出来事は、鮮明に記憶に残っているからこそ、愛しさが募る。

ああ、一世紀近く生きておきながら、たかが十数年前の他愛ない瞬間が恋しいとは。

年甲斐もなく逸る気持ちに我ながら呆れて肩を竦めた。

しかしまあ、それもまた一興。

年に一度しかない特別な日なのだから、普段と違う仮面をほんの僅かの間被るくらい許されるだろう。時間にすれば数分もないのだ。それくらいで目くじらを立てるような心狭い相手を上に持った記憶はない。新たな命を迎え、我々の抱く計画が綿密な軌道に乗ったあの日からその役割を任せられているのだから、今から改めてそう振る舞ったところで何の問題もないだろう。

「そろそろ、いいですかねえ」

適当な理由を思い浮かべられるだけずらりと並べて己に言い聞かせた後で、ずらした視線の先、テーブルに鎮座している古ぼけた据え置き電話をじつと凝視した。

此処を根城にして随分と経つが、それが本来の用途で使われたこと

は一度もない。私用で使うようにと用意したものだったが、これまでただの物置同然だった。それなのにまさか、こうして本当に役に立つ日がこようとは。このときのためにと己で用意したはずのそれに苦笑交じり歩み寄って、月明かりに薄っすらと艶光する受話器を手を取った。浅く息を吐き、暗記している番号をダイヤルする。

いつもと変わらぬ平常心を装いながら、内心は僅かばかり緊張していた。

ここは戦場ではない。殺し合いの場でもなければ、騙し合いの場でもない。

つまりは任務ではない。ただの私用で、過去共に暮らしていた相手に電話を掛けるだけのこと。それも相手は年端もいかぬ子供だ。

それなのに今の私と来たら。随分と情けない、笑ってしまう話だろう。

それも逆に言えば、任務ではないからこそなのだろうが。

まだこんな風に心揺れることが残されていたのかと少しばかり驚きながら、回線の向こうの音に耳を傾ける。遠く離れた異国と繋がって、鳴り響く電話の呼び出し音。普段公に使っている電話と違うものだから、聞きなれない音だ。だが、変化があるとすればこれ一つだけで、この音が繋がっている先の音はきつと聞き慣れたものそのままだろう。新調したとは一言も聞いていない。きつと、私が出ていったあの頃のまま、殆どのものが残されているだろう。

あの教会に置かれた電話の位置が昔と変わっていないのだとすれば、きつと朝の光差すりビングで私の心を映したように今か今かとはかり大きな音で鳴っているに違いない。

そうして受話器を押し当てたまま、どれくらい待っただろうか。海を隔てた向こう側に待ち望んでいた反応があった。

実際はたいした時間ではなかっただろうに、年甲斐もなく逸る気持ちにか、やけに空白の時間が長く感じてしまったのだから困る。

せっかく電話が通じたのだ。今日という日はこの一度きりなのだし、慣れない心に困っているだけなのも、喜びに呆けているだけなのも勿体無い。この状況を余すことなく、楽しまなくては。ひさびさに

寂れて枯れた心が動いたのだとすれば、なおのこと。

そうして気を引き締めてみて、気付く。

受話器を持ち上げる癖が、いつもと違う。それだけで、電話を受けたのがいつもやり取りを交わしている相手でないことが知れた。

あの場所に住んでいるのは二人だけだ。客人が訪れていたとしても、それこそよほど親しくなければ、他人の家の電話など取りはしないだろう。

そうなると、やはり電話を取ったのは――。

無意識に、口元が綻んだ。その口元につられて弾んだ息のまま、久方ぶりに声に乗せて呼びかけようと唇を開く、が。

「テ――」

――ガチャリ。

無情にも、電話が切れた。押し当てた受話器から、鼓膜に響く回線不通の電子音。

それが示す現実には、呆気にとられたまま立ち尽くす。

棒立ちになったのは、一方的に電話が切られたことがショックだったからではない。それとは真逆、喜びに、だ。まったく予想していないわけではなかったが、まさか、こんなにも喜ばしい展開になるとは思わなかったものだから、つい。

「ふ……、ふふっ」

思わず、口元がだらしなく緩んで、笑みまで溢れた。

ああ、これは何とも、彼女らしい。

「こうも期待されると、腕がなりますねえ」

カチャリと、喜びに弾んだ手付きで受話器を戻したその手で、相手の期待を裏切らないように、即座に受話器を取り直してリダイヤルする。

はてさて、一体何回目で折れてくれるのか。

こういう意地の張り合いは楽しい。踏み締めた地球の直径を挟んで彼女とじゃれ合っていると思えば愛しくてしょうがない。それも、こんな特別な日に。

これは、何とも贅沢な。年甲斐もなく浮かれてしまうのも仕方ない

と許して欲しい。

——ジリリリリリリ!!

二度目の呼び出し音は、またしつかりと主張をして鳴り響く。そうこうしているうちに繋がった。が、途端に受話器を置かれる。再び、耳元に鳴り響く通話終了の電子音。

本来なら凹むべきだろう、その非情な音。楽しいまま余韻に浸りたくなる気持ちをなるべく押さえ、極力愛し子に邪険にされる哀れな養父の必死さを醸し出すように、追い縋る。端的にいうと、ダイヤルする速さを倍にしてみた。

——ジリリリリリリリリリリ!!

折り返す電話のスパンは早い。

きつと懇願めてりビングに響いただろう、電話の音。

それを受け、またカチャリと受話器の上がる音。今度は、回線を断ち切る非情な音は続かなかった。

三度目にして、切れなかった通話。ああ、思ったより回数が掛からなかった。もうちよつとじやれてくれてもいい。構って欲しいと彼女が言うなら、一晩でもそれ以上でも付き合うことなど造作もない。そんなことを実際に口にすれば、容赦のない彼女たちのことだ。軽蔑混じりの冷ややかな視線は刺さるだろうし、華奢な背中越しに冷めた微笑みまで飛んでくるだろう。

だからまあ、その点に関してはさりと流して口を噤むとして。

「ちよつとテレジア、いきなり切るなんて酷いじゃないですか」

『……………』

電話の向こうの相手に会話を試みることを許されて、ここぞとばかりに軽く肺に息を吸い込む。そうして握った受話器に向かって拗ねた声を上げてみせてみせれば、返ってきたのは息を潜めた沈黙。

懐かしい。まだうんと幼い彼女がつかない態度を取るたびに、こうやってわざと拗ねてやってみせたものだ。

自惚れかもしれないが、これは彼女のそういう愛情表現だ。私と彼女と、更に言うならもう一人の育て親と築き上げてきたものだ。

わざと冷たく当たってみせて、逆に突き放されないかどうかーそ

ここに注がれる確かな愛があるのか試している。そんな、少しばかり幼稚な彼女の行為。ある意味、甘えられていると言っている。

そんなだから、邪険に扱ったことを怒っていないと、弱って拗ねて機嫌を取ってみせると彼女はこそりと安心するのだ。年を重ねて成長しても、育て親に対する根本的な部分に変わりはないようだ。

「その様子だと大丈夫なようですねえ。」

——つてあのおう、テレジア？ 私の声、聞こえていますか？」

さて、電話の向こうの沈黙はいつまで続くのか。そう構えて二の句を告げたのに、想像していたよりもあつさりと待ち望んだ声は聞こえてきた。

『ちやんと聞こえてるよ。』

すごいね、神父様。喋っていないのに私だつて分かるんだ』

淡々と吐き出される中に、うつすらと喜びが滲んだ声。ああ、すいぶんと大人びたものだ。

言葉を交わすのはずいぶんと久しぶりなのに、つらつらと堰を切つたように続く言葉が溢れ出る。そうしてそれは、彼女も同様に。

「ええ、それはもちろん分かりますとも。」

というか、あんなヒドイことを私にするのはあなたくらいでしょう。

シスターリザがこちらに対して怒つてでもいるならあなたでない可能性も出てくるでしょうが、あいにく私は彼女の怒りを買うようなことをした覚えはありませんので」

『ふうん、それホントかな？』

リザ、神父様がなかなか連絡くれないつて言つてたよ。フォローしておいた方がいいんじゃない？』

「うつ……それは不味いですね。テレジア、御忠告どうもありがとうございます」

『ふふっ、冗談だよ。怒っていないから安心していいよ。ただ、たまには声を聞かないと存在を忘れちゃいそうつてしれつと言つてたのはホントだけど』

「なんと、そつちの方が怒られるよりよほど深刻な事態のような気が

するのですが。これは参りましたねえ」

回線越しに叩き合う軽口は離れていた時間など忘れさせるほどに軽やかで、身に馴染む。

くすくすと電話の向こうから聞こえる忍び笑い。そんな風に大人びた笑い方をするようになったのかと思うと感慨深い。脳裏に映る幼い彼女の面影が、少しずつの実感を伴って写真越しにだけ見た彼女の今の姿と重なっていく。埋まっていく、時間の距離。それが随分と、心地よい。

『今から話せばいいんじゃないかな。きつと喜ぶよ。』

それに神父様、リザに用があつてかけたんでしよう？　ちよつと待つて、電話変わるね』

「いえ、それには及びませんよ。今日この電話はあなたに用があつてかけたのですから」

本題を思い出したとばかり、言うが早いか華奢な手にするりと降ろされかけた受話器。それを呼び止めたくて静止の声を放れば、微かな沈黙。

外れた予想と、それとは裏腹に心にあつた僅かな期待。それにほんの少し緊張でもしたのか、か細く、息を呑んで揺れた空気が回線越しに伝わる。

ああ、そんな仕草の一つ一つが、こんなにも愛おしく、愛らしい。その気持は私にとって紛れもない本心だ。離れていた十数年の間にも、決して潰えることのなかった愛おしい感情であり、そしてまた、彼女にとって特別なこの日を共に祝いたいというこの気持にも偽りはない。

だから、告げる言葉はこの胸の内に抱え込んだ余計なものが混じり込む隙きなどないほど、簡素に。けれど愛しいと、溢れんばかりの万感の気持ちを込めて。

「――誕生日おめでとうございます、テレビア」

伝えた生誕を祝う言葉に返ってきたのは、か細く、愛らしく息を呑む音。そうしてそれに続くしばらくの沈黙。その後で、強張った身体がふわりと解けてゆるりと緩んだ空気、繋がった回線越しに届いたの

は柔らかな喜びの色だ。その柔らかい色のまま、片手で支えた受話器越しに望んだ声が返る。

『ありがとう、神父様。一番乗りだね、嬉しい?』

「おや、本当ですか?」

ええ、もちろん嬉しいですとも。しかし、おかしいですね。朝食の時間でしようにリザには会わなかったのですか?」

『リザ? キッチンにいるよ』

「そうですか。ああ、なるほど」

正直、これは予想していなかった。まさか誰よりも先に、彼女の生誕を祝えるとは。

どうしてなのかと気になったことを問うてみれば、あっさりと真相は明るみに出た。

どうやら私は、先を譲られたようだ。世話焼きな彼女にテレジア諸共お節介を焼かれてしまったらしい。

件の彼女は、キッチンにいるという。朝食にしては少し遅いこの時間にそこに陣取っていることと今日がどういう日なのかを照らし合わせれば、彼女の目的は聞かずとも自ずと知れた。毎年恒例のことではあるが、今年もきつと手ずから作ってやっているのだろう。今も作業の手を止めてはおらず、それを証明するように、耳を澄ませば少し遠くからかちやかちやと掠れた音が鳴っているのが聞こえる。その音がキッチンに立つ彼女の手元から鳴っているのなら、その完成まで、まだ時間が掛かるのだろう。

先を譲ってくれたのは、育て親としての彼女の優しさはもちろんのこと、完成までの間を繋いでいて欲しいという意味もあったのかもしれない。

それならば、ともう少しだけ楽しみたくなって、冒頭のやり取りを蒸し返してみることにした。そうそうない機会なのだから、他愛ないやり取りをもっと望んでしまう心のまま、唇を開く。

「まったく、私は早くあなたの声を聞きたくて仕方なかったんですよ。それなのに喋る暇すら与えてくれないとは扱いがひどすぎやしませんか?」

心にもない言葉をつらつらと。またお約束程度に邪険に扱われるかと思いきや、その予想は嬉しくも外れて。

『ごめんなさい、イタズラしたかったんだ。久し振りだし、ガマンできなかったの。怒った、神父様?』

「まさか。あなたへの愛を試されているようで悪い気はしませんでしたよ、むしろあなたらしくて喜ばしかったくらいだ」

『……何それ痛いね。私、そんなつもりないんだけど』

「そういうことにおきましようかねえ、あなたはいつも素直でないですから。そういうところも愛らしいと私は思いますがね」

『うるさいな、神父様の変態。そんなこと言うならもう切るから』

年相応より少し幼く、拗ねた声が雑音混じりに聴こえる。おまけに離れた場所にあるキッチンからくすくすと、話し相手の彼女には聞こえないほどに声を絞られた忍び笑いまで聞こえてくるのだから頂けない。

遠く離れてこそいるものの、十数年振りにひさびさに味わう、穏やかで懐かしい雰囲気は自然と声と頬が緩んでしまうのだから、困ってしまう。

「おや、もう少しくらいいいじゃないですか。私はまだあなたと話したい。せつかくの誕生日なのですから。」

……ああ、元氣そうな声は聞こえるのに顔が見えないのが残念ですねえ」

拗ねた軽口混じり、他愛ない会話を重ねていくうちに、秘めていた本音が、ぽつりと口を吐いてでる。

本来の立場を思えばあまり褒められたことではないかもしれないが、今は養父としてここに立っているのだ。それで彼女が安心してくれるなら、甘い言葉などだけでも重ねられる。否、どれほど重ねても届け足りないように思う。

この十数年、用が済む度にあちこち点々と家移りしているはずなのに、どういう手段を取ったのか。頼んだ覚えのない写真がお節介な彼女からたまに送られてくるが、それではいささか不十分。やはり生きて——感情のままに動いて、拗ねて、頬を染めてはにかむ彼女の姿を

この瞳に映したい。

ああ、彼女に会いたい。間近に顔を見て、どれだけ大きくなったのか、写真だけでなくこの瞳で確かめたい。それが叶わぬと分かっているからこそ、余計に焦られる。

声を聞けば、よく分かった。さぞかし綺麗に、聡明に育ったことだろう。

少なくとも、口が達者に育ったのは間違いない。口喧嘩は私はもちろんのこと、共にいる彼女も十分に強い方だ。ある意味育てた私たちに似たのだと思うと、感慨もひとしおというものだ。

もちろんそれをテレビジョンに伝えれば、彼女はともかく私には似たくないと言った顔を浮かべるでしょうが。

——それでも、きつと似ている、と。

その事実を内心、多少は喜んでくれるのではないかと期待してしまう。これは育て親の欲目というものでしょうかねえ。

ああ、抱きしめたい。

顔を見て、頬を撫でて、綺麗な銀糸を指先で梳いて、慈しみたい。大切なのだと、伝えたい。

胸に滾々と湧くのは、そんな想いばかりだ。

今ここにいる私は、ただの彼女の養父。そのつもりでこうして地球の裏側から遥かな距離を跨いで会話を交わしている。

そう思うのは、おこがましいだろうか。

それでも、私の大切な愛し子が望むのだ。養父として、今日だけは在って欲しいのだ、と。言葉にはせずとも、ひたりと注がれた心で感じる。

それに応えたいと思うのは、たとえ汚れていたとしても聖職者として在る以上間違っではないと信じたい。そう思ってしまう己に苦笑交じり、残された僅かな時間を存分に味わおうと言葉を途切れ切れた言葉を繋げる。

「そうだ、テレビ電話が欲しいですねえ。いつそのこと、居間のそれを新しいもの買い替えますか。そうしたらあなたの顔を見ながら会話ができる。必要ならば喜んで贈りましょう。」

ええ、我ながらいいアイディアだと思うんですが、どうでしょう?」
『イヤ。そんなことしたら絶交するから』

浮き浮きと、思いついたことを思いついた側から提案した途端、地球の裏側から真っ直ぐに飛んできた否定の声。それに、弱った声を出して追い続ける。これはもう、一種の様式美だろう。

「いいじゃないですか、顔が見えた方がきつと楽しいでしょうし会話も弾むと思うんですがね」

『ダメ、絶交。そんなことしたら絶対、口きいてあげないから』

ああ、可愛らしい。口を聞いてくれないと私が凹むと、それが堪えるのだと当然のように思っている彼女の考えが、愛おしくてたまらない。

「そんなあ、テレジア。そんなこと言わず、ちよつとだけ。ね、検討するくらいはしてくれてもいいんじゃないですか?」

『ちよつともなにもないよ。一ミクロンもない。残念だね、神父様』

「そうですか、それはちよつと……いえ、だいぶ残念ですねえ。」

ですがあなたに嫌われては元も子もない、ここは大人しく引き下がるとうましよう」

名残惜しいが、ここまで。これ以上続けてしまつては本気で彼女の機嫌を損ねてしまいそうだ。そうなつてしまうのは私の本意ではない。

今日は何にも増して彼女にとって特別な日であるのだから、それを彼女が正しい意味を持って知らないにしても、良き一日であるべきだ。

そう望んで、そう願つて、こうして随分と久方ぶりに彼女の背を押したくて直接的な手段を取つたのだ。断つていたはずの長い時間は、掛けた電話一つであっさり繋がつた。驚くほどあつけなく、そして、想像よりも遥かに愛おしく。

今日を皮切りに、彼女にはいつそう幸せに生きて欲しいのだ。そう、残された終わりが近づくあの約束の日まで、どうか他愛なくも愛おしい穏やかな日々を。

私を言い負かしたことですっかり機嫌がよくなったのだろう。

電話の向こうで、楽しそうにテレジアが頬を綻ばせた気配がする。きつとはにかんだ笑顔を浮かべて、そこに立っているに違いない。

結果は上々、ならばもう引き時だろう。

「ああ、そうだ。テレジア、リザにありがとうと伝えてください」

『リザに？ うん、分かった。伝えるね』

聞き分けの良い了承の返事。何に對して、とは聞かれなかった。私が彼女に礼を言う理由など山のようにあるからだろう。テレジアがらしたら、もっと彼女に深く感謝するべきくらい思っているようなものだ。ろくにまともな連絡すら超越さず仕事に傾倒してばかりの養父には、返す言葉もありはしないが。

伝言を受けてくれた旨に對するお礼がてら、今日の日について最後にもう一言だけと声を重ねる。

「ありがとうございます。」

——今日一日が、あなたにとつて素晴らしい日になるように私も祈りましょう。離れてはいますがね、この祈りがあなたに届けばこれ以上に嬉しいことはない」

『……うん。ちゃんと、届いてるよ。ありがとう、神父様』

微かな沈黙のあと、嬉しさにだろうか、ひそめた声が柔らかく途切れがちに届く。きつとはにかんでいるだろう頬が、間近に拝めないことが何とも齒痒い。

もっと楽しみたい気持ちは正直あるが、あまり長々と会話をするのはいただけない。そろそろ、彼女をリザに返した方がいいだろう。

彼女だつてこの日を楽しみにあれやこれやと準備をしてきたはずだ。それを降つて湧いた一本の電話に、年に一度しかない機会を黙つて先を譲つてくれただけで、こちらとしては十分だ。それに、あまり長く声を聞いていると離れ難くなつていけない。

「それはよかつた。では、また」

『うん。またね、神父様』

「……ええ、愛していますよ。テレジア」

また、という言葉が心にじわりと疼いて刺さる。その気持をさらりと振り解いて、代わりに特別な日だからこそ許される愛の言葉を唇に

乗せた。

ゆつくりと降ろされた受話器に回線が切れる間際、古くから見知った彼女が囁いた声を私の鼓膜がはつきりと拾う。

テレジアには届かない。この場では、人外に身をやつした私だけが拾える秘められた言葉。

漏れ聞こえていた彼女の笑い声とは違う、久しぶりに聞いた優しい声音が耳朵をくすぐる。

『——こちらこそありがとう、ヴァレリア。あの子にとって素敵な一日にするって約束するわ』

——カチャン。

馴染みのある彼女の声が途切れるのと入れ替わりに鳴った、静かに乾いた音。

それに完全に回線が途切れたことを知る。薄暗い部屋の中に、ぼつりと孤独に一人。それでも、この胸に残るものは確かにあった。

「ええ。約束しましたよ、リザ。彼女を頼みます」

柄にもなく明るい喜びで綻んだ唇で、もう断絶され届かない返事を声に乗せる。

テレジアには内緒で密やかに交わされた、私たちの約束。

阻む距離は、随分と遠いのだ。どうか私には叶えられない分だけ、彼女を慈しみ、甘やかし、愛してあげて欲しい。私が乞わなくても、彼女ならそれと迷いなく叶えてくれるだろうが、約束という形に収まったことで、それはとても心強い。

彼女がついていけば大丈夫だろう。ここまで積み重ねてきた幼いテレジアとの記憶を思い返せば、疑うべくもない。

その点に関して信頼できるからこそ、テレジアを託しあの地を離れ、今ここに役目を果たすべく私はいるのである。

この良き日に、彼女の声が聴けてよかった。これでもう、修羅の道を進むことに一片の迷いはない。

握っていた受話器を、静かに降ろす。

乾いた音を立てて然るべき場所に収まった途端、用を成したそれは意味をなくし、灰のように跡形もなく崩れ落ちた。冷え切ったテーブル

ルの上には、さつきまで此処と彼処を繋いでいた、それだったものの残骸がはらはらと散って僅かに残るのみだ。

戯れの時間はこれにて終わり。来たるべき終わりの日へ向けて、課せられた任務に邁進するのみ。

夜空にかかる雲はいつの間にか濃さを増し月明かりを遮って、一人佇む部屋を満たすのは、深い闇。常人では一寸先すら見えず、身の毛がよだつほどに恐ろしく深い。

そう、それはただの人であれば。この身は既に魔導に堕ち、ならば恐れるものなどない。

——ああ。

ただ、一つ。この世界に生まれ落ちた規格外の対なる存在を除いては、だが。

「さあ、行きますかねえ。残された時間もそう長くないのですから、立ち止まってもいられない」

そう独り言ち冷えた床を踏み締めて歩を進め、月の隠れた夜空の下へ躍り出る。

定めた行き先は、ああ——我ながら、随分と恐ろしい。

起こすは、戦争。黄金の獣に連なる、戦火激しい破滅への道。聖餐杯の名の元に、どれほどの厄災がああかの街に降りかかるのか。考えただけで、敬虔なカソックを纏った背筋が昏い歓びに震えて、唇が緩んだ。

END